

仰げば漏るゝ星屑や  
闇に絶わざる水の歌

あゝその光りその響  
こゝろみ難し解き難し

# 小 詩 會

○ 南の海浮藻の下に珊瑚とる雄々しき人を戀ふる目もあり

桔 梗

○

君待つ夜絃をはなれて白梅の香りと消えし琴のそら鳴  
小走りに袂はらゝ京染の暖簾にきけし春ともしころ

蘆 笛

○

君が賜ひし歌のかへしはさりながらかゝり聞えし唯胸に秘めむ  
夏かくす京友禪の振袖や酒のこぼれに幾年しみき

白 月

○

一つ家はいと花やかに夕日しぬ柑子色づく畑の中に  
白雲の流るゝ空よ故郷と小手かざし見る旅の夕ぐれ  
小羊はみな若草の香に酔ぬ眞晝を戀の牧守が歌

花 柴

○

不 割 石

まぼろしに似しと計りの日記ゆるに忘れ難き人を泣き居ぬ  
磐村や下の濁世の戀もなき國裂き根裂く斧ときく歌  
三重の紐緋の香さゆらぐ銀燭に小兎つなぐ圓柱かな  
み光のひろごり敷きて戀の世とならば秘めすて叫ばん歌よ  
白梅に瑠璃の花空とき空をあふぎさうぞく伊勢遣者かな  
北山に好事召します使者の役浪速に下る晝霞かな  
花咲けば散れば宴の立樂に拍子興がる青海波かな

○

露  
草

海しらぬ乙女なつかし薊煮ると曉起の灯を消してける  
二十重なる青葉の底に新らしき國見出でける小佛越ねて  
三尺は菖蒲に重き紅絹の袖背向の君よ舟棹し給へ  
石打てば木魂や誘ふ古潭に沈黙かへり來太古の様に  
古希臘のよき夢見ると陶物の壺だきてぬる若き友かな  
紀の國に入る日は知らず茅渚の海や人美しくしき國思ふかな  
ゆきづりに杖して來しをねん母と見し旅心夕霧の街